

記念フォーラム

リレースピーチ

「山とまちと木造建築」

記念フォーラムは記念講演や基調講演に代わるものとして企画され、テーマは京都大会が掲げる「山とまちと木造建築」4年間の準備期間を通して貫かれたこのテーマでリレースピーチとパネルディスカッションが行われました。

また、フォーラム開催前には京都でも見る機会の少ない「手斧なぐり」の実演を京都京北の原田隆晴氏により行いました。

安田哲也 | NPO法人サウンドウッズ 代表理事、有限会社ウッズ 取締役

秦 めぐみ | 京都秦家 主宰

三澤文子 | MSD 主宰、(一社)ウッドマイルズフォーラム 副会長、(一社)住宅医協会 理事

パネルディスカッション参加

木村忠紀 | (株)木村工務店 取締役会長、京都府建築工業協同組合 理事長、京都府優秀技能者 現代の名工

コーディネーター

高田光雄 | (一社)京都府建築士会 副会長、京都大学 名誉教授、京都美術工芸大学 教授

リレースピーチ 山 の安田氏は、森と木と木造建築を結ぶ仕組みづくりをされていますが林業の将来を心配し、「建築士が木の文化と林業を絶やしてしまうのではないかと危ぶんでいる」と始められました。「若い頃ジンバブエでの土を捏ね焼いて建築をつくる経験から、建築が成り立つ背景を読み解き、その土地だからこそできる建築を日本でどのように開くかを考え、また森林の疲弊を知り社会課題である」と思ったそうです。林業は「立木の品質単価を上げ、生産量を増やすなかで育林と生産の費用を抑えるのが生業」だが、儲か

らず、林業経営者が山から離れる経営放棄が起きている現状を話され、15年間の森林所有者と直接つながる家づくりの取り組みから立木の価値を適正に評価活用してほしいという林業側からのメッセージを伝えられました。

最近のエンジニアードウッドの可能性や林業を下支えていることは認めつつ、「森林所有者には収益が残らない」状況で、立木の価格が山元の収益として残る製材と、加工費が林材産業の収益として大きい集成材との価格構成比較の説明をされ、集成材の否定ではなく、できることはなるべく製材を使い山

元に収益が残るようにしてほしいとのことでした。「山の木を育てる(高付加価値化) 儲ける、やる気が生まれるという中で次の森を育てるのが林業の未来を育てる」建築士の役割は、木の文化と林業を未来につなぐことで、みなさんが牽引していただく役割です」と締めくくられました。

まちの秦氏は、幕末の動乱で焼失後明治2年に再建された表家造りの京町家の住まい手さんです。「『小児薬 奇應丸』の屋根看板を掲げ、伝統的商家の趣を残した表棟、玄関棟、住居棟、土蔵を中庭と奥庭がつなぐ形式の職住一致の住居」と説明がありました。カドから入った店の間、玄関、茶の間、その奥の中庭までは「生活感を匂わせることのない公の空間と意識しての暮らし」があるそうです。「その奥は日常生活空間で、食をつかさどる走りニワは火の用心の御札を掛け、竈の神様を祀っています。奥の座敷は仏間も兼ねた最も厳肅なところでお正月や節句など以外普段家族は使うことはありません」「座敷の奥の奥庭は季節感にあふれ、庭の繰り広げるさまざまな自然のリズムは同時に進行する日々のリズムとして家人の体内に刻み込まれています」と自然と交流しながらの毎日の暮らしをスライドとともに話しされました。



山 安田氏によるリレースピーチの様子

お住まいの祇園祭の太子山を出す「太子山町」については、お祭りを迎える頃のまちの人々の気持ちやハレの空間となった非日常の表から家の中までの様子など、毎日の家とマチとの関係も伺いました。「住まいの公開は過去の遺産の鑑賞にとどまるのではなく、受け継がれてきた文化を今の時間軸の中につまやく溶け込ませ、さらに使い込んでいくための知恵と工夫の必要性で、それらは丁寧に繰り返す日々の暮らしの中に潜んでいます」と話され、「便利で豊かな暮らしを求めてきた社会は価値観の転換期にさしかかっていますが、今それを伝承できる環境を持ち合わせていません。家を住み継ぐためにも先人たちの知恵が継承できる物を選び取る工夫が必要です。文化はすまいを舞台に育ちそこに凝縮蓄積され、形態的な京町家の保存のみをめざすのではなく、その中で今に息づく暮らしの醍醐味を味わってもらえないか」と模索をされているとのことでした。

木造建築の三澤氏は、はじめに木造とライフワークになった民家型構法との出会い、気候風土から導き出される基本構造(架構)と住み使う人々のための多様な空間が重なって景観や文化をつくっていくという民家



記念フォーラム会場全景(スクリーンは木村氏)



登壇スピーカーの方々

型構法の基本理念を話されました。また、「山の木材を生産をする人たちから町の住まい手までを結ぶ一貫した木造設計技術を生産者は持つべきで、実践してきた」と話され、阪神淡路大震災の調査から生まれた耐震チェックブックや、その後のMOKスクールや岐阜県立森林アカデミーでの人材育成の活動についても伺いました。

なぜ木造なのかについては、アジアモンスーン気候と日本との適性、森林と日本の文化、大工工務店の継続できる生産システムなど5つのポイントで話され、「山と海に囲まれ暮らしてきた日本人の森林文化が私たちの

風習や感性にまで影響を及ぼしてきた」なかで、木造設計技術の職能を高める日々の実践として、「山へ行き林業を知る、木材検査を行う、木配りをする、接合部を決める」と述べられ、作例スライドでは、準防火地域での木にあふれた住宅、地元の山の木を使った古い町家の改修、木の空間を分かち合う高齢者施設などが紹介されました。「いま分断されている山とまちを血が通うようにして、健康にしてい、それを繋ぐ仕事の木造建築設計によって、設計士がその繋ぎ役になることが必要とされている。この緑の列島が健康で美しい国土になるように」と結ばれました。

パネルディスカッション

パネルディスカッションは本会高田副会長の進行で、大工棟梁の木村氏を交えて進められました。

木村氏は「施主、設計者、施工者の正三角形の関係が崩れつつある。予算を無視した設計や木の使い方や構造を知らない設計者、みなさんも当事者である施主が、建物には維持費がかかることを認識しない」と施工者側の意見を出されましたが、「それぞれの地域にある建築のつくり方にどう関わり、切り込んでいけるかわからない世代がある(安田氏)」「阪神の頃に比べ木造教育もずいぶん変わってきた(三澤氏)の意見のあと、木村氏は「施工者が自分の考えを曲げないのはダメ。木造の防火では実験で多くのことを学んだ」などの考えも示されました。

使い方や住み方の関係からは、「自分が家でのどのような暮らしをするのかが見えず想像

できない人たちに、その形がわかる窓口があると良い(秦氏)」「住宅は使い手とすまい手と同じ、その関係をフォローするつくり手があるべき(安田氏)という意見や、「建物を調査診断する能力を高め、改修計画を立てる『住宅医』という職能(三澤氏)の紹介がありました。

生活文化と木造建築の関係からは、「日々の暮らしの環境は成長期の子どもたちに影響を与えている。日常生活を見つめ直し何を選び取る、次の文化を担う子どもたちをどのように育てていくか、会場のみなさんもその担い手です(秦氏)とのお話でした。

最後に、「日本の山には地域、地域の森林や林業家があり、それぞれの地域の建築文化や森林文化を担っている(安田氏)」「なぜ仕事をするのか、世の中のためになる、人の役に立つというのが仕事をする理由なのではないか。被災地での調査では住宅医であるこ

とに対して安心された。その安心に応えるためには知識や判断力を高め、私たちの能力を伝えなければいけない(三澤氏)」「建築士はまちなみをつぶさないこと(木村氏)のメッセージのあと、「林業家と設計者、施工者とすまい手の相互関係をより強める仕組みづくりや取組みが木造建築が社会の役に立ち、それが建築士会の役割である」との高田氏の言葉で記念フォーラムを終了しました。

2014年のキックオフミーティングにはじまり、京都の多くの森林や木造建築の方々や議論を重ね、近畿土会の皆様や全国の建築士の方、登壇のパネラーの方々とは複数回の議論の場を持ち、今回無事にフォーラムを終えさせていただきました。担当部会として御礼申し上げます。ありがとうございました。

(山本晶三 / アクション部会部長)